

Ⅱ 第1次朝堂院地区の調査（第111次）

調査地は昨年度の第102次調査地の南に続き、東第2堂の基壇と目される土壇が南北に延びている。また調査地は推定第2次朝堂院の西門推定地の西方にあたり、二つの朝堂院に挟まれる地域の性格を捉える上で恰好の地点にあたる。調査は昨年度の第102次調査で一部検出された東第2堂の規模の確認と、両朝堂院間の通路等の有無の確認を目的におこなった。昭和53年4月3日に開始し、7月15日に終了した。調査面積は3,300 m²である。

遺 構

発掘区の旧地形は推定第1次内裏地域から南に延びる小支丘の東南部のなだらかな傾斜面にあたる。この谷筋の堆積土が宮造営時の地山面である。宮の造営に際し整地を行い傾斜面を平坦に造成している。整地は大きく5時期に分かれる。

第1次整地はバラス混りの灰白色粘土を主体とする整地土で、東第2堂SB8550の東に広がりを持つ。発掘区の東端では、この整地土は第2次朝堂院地区の整地土の上にのっている。第2次整地は主として暗灰色粘土が使われ、全面一様に敷かずに、第1次整地の窪みを埋めるようなかたちで、整地されている。第3次整地はSB8550とSA5550の間に見られる局地的な整地で、黄褐粘土・黄灰砂質土が使われている。第4次整地も局地的であり、黄褐砂質土・灰褐砂質土が使われ、第1次整地の溝状の窪みSX8956を埋めている。第5次整地は朝堂院廃絶後の整地である。SB8550とSA5550の両基壇に挟まれる窪みには、瓦を多量に含む灰褐砂質土で、朝堂院の東にはバラスを含む暗灰粘土で整地を行っている。

A期 第1次整地以前の時期にあたる。SD9020は発掘区西辺部中央にあり、幅0.8 m、深さ0.5 mの素掘りの東西溝で、造営時の区画溝の可能性がある。第97次調査でも同様な溝が検出されている。その他、発掘区南西部に古墳時代の遺物を含む小ビット群があるが、遺構としてまとまりがない。

B期 第1次整地後から第2次整地以前の時期にあたる。SD3765は南北塀SA5550の西約4 mの位置にある素掘りの南北溝で、幅約2.5 m、深さ0.8 m。

2層の堆積が認められたが、埴輪片が少量出土したにすぎない。

SA 8410 は、SD 3765 の東約 17.5 m に位置する掘立柱の南北塀である。掘形は一樣でなく、一辺 1.8 ～ 1.1 m の矩形で、約 3 m 間隔に掘られている。4 ケ所断ち割りをおこなったが、柱痕跡は検出できなかった。SA 8410 は第 1 次朝堂院の中心線より東へ約 120 m 離れた位置にある。

SX 8559 は SA 5550 の基壇下を南北方向に延びる土塁状遺構である。幅約 1.8 m 高さ約 0.3 m 程の土盛を小礫混りの黄褐土で築いている。この位置は次期の SA 5550 の位置に相当する。第 2 次整地は SX 8559 の全体を被うことなく、頂上に高さを揃えている。この事実から SX 8559 は SA 5550 の掘形を揃えるための目標として作られた可能性が強い。

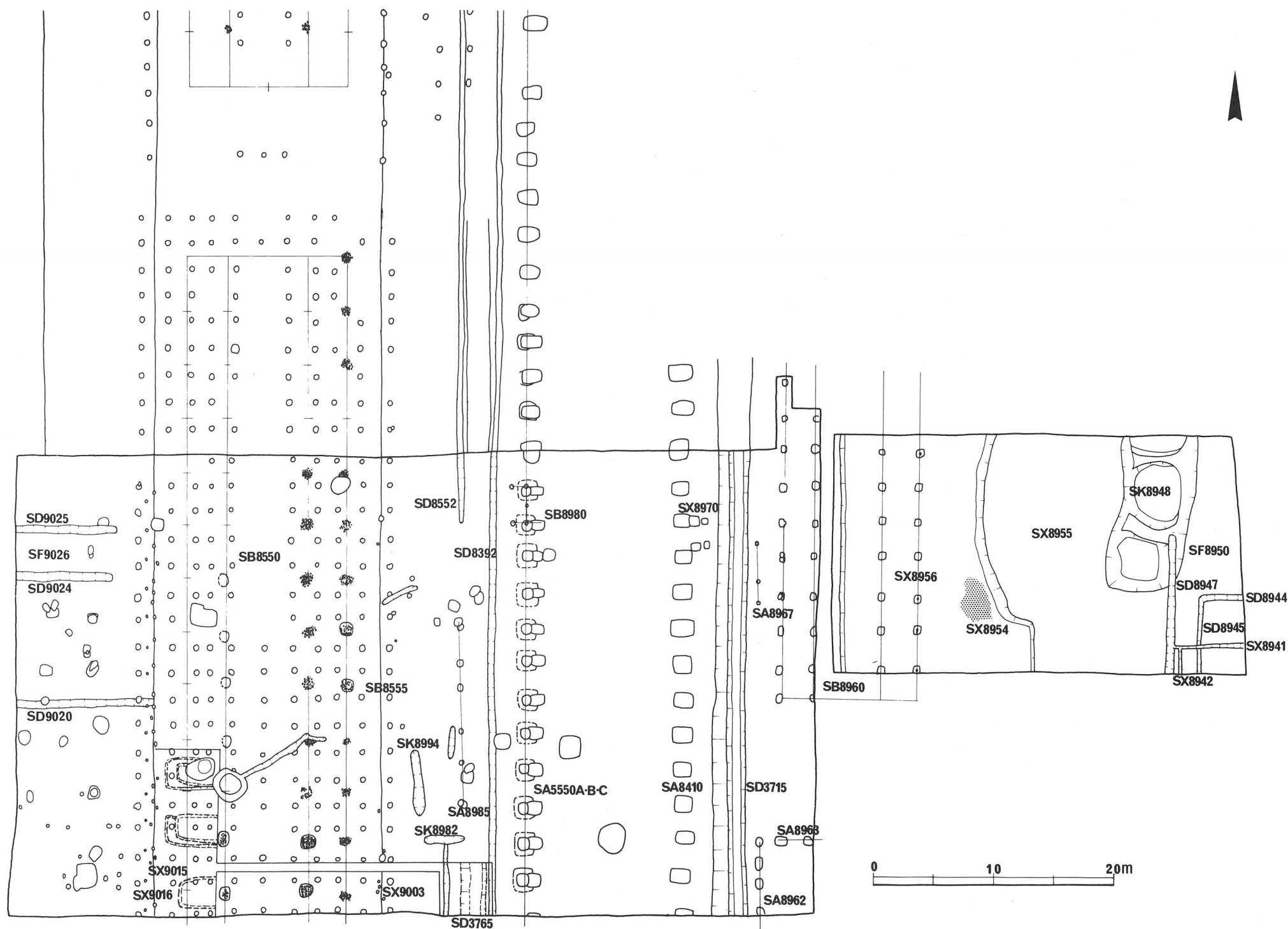
SX 8956 は SD 3765 の東約 35 m に位置する幅 11.0 m、深さ約 0.4 m の溝状の窪みである。第 4 次整地に際して埋められる。

SD 8944 は発掘区東辺に推定第 2 次朝堂院地区から西流する東西溝で、南に折れて SD 8945 となる。素掘りの溝で幅 0.5 m・深さ 0.6 m。

C 期 第 2 次整地から第 3 次整地以前の時期である。

SA 5550 - A は、推定第 1 次朝堂院の東を画す南北塀である。掘形は長辺約 2 m ほどの矩形で柱間は 10 尺等間である。今回調査した SA 5550 は保存状態は極めて良好で、3 ケ所断ち割りを行い、SA 5550 の変遷に関する貴重な資料を得た。SA 5550 - A は柱を建てたのち、幅約 6 m の基壇を構築している。柱抜き穴はこの基壇面から掘り込んでいる。SA 5550 - B は SA 5550 - A の抜き穴の埋土を切り、その上層に築地本体と考えられる盛土 SA 5550 - C を検出した。従って SA 5550 は、塀 A → 塀 B → 築地 C と変遷する事が明らかになった。

SD 3715 は第 1 次朝堂院と第 2 次朝堂院の間を流れる南北の基幹排水路で、幅 2 ～ 3 m・深さ 1 m である。2 回の改修の跡があり、上層・中層・下層溝の 3 時期に分かれる。下層溝から木簡が出土し、中層溝から神亀 5 年の木簡が出土した。第 102 次調査では、この層位から天平 5 年の木簡が出土しており、また第 97 次調査で下層溝から神亀～天平初年の紀年のある木簡が出土していることから、第 1 回



第3図 第111次調査遺構図

めの改修の時期は天平初年頃と考えられよう。上層溝は調査区を貫通せず途中でとぎれ、遺物は少ない。平安時代初頭まで存続する。

SF 8950、SD 8947 は第91次調査で検出した内裏外郭の南門SB 8160に通ずる道路SF 8950と、その西側側溝SD 8947である。SD 8947は南北の表掘り溝で、幅0.9 m、深さ約0.6 m。この溝の掘込み面は第1次整地であるが、門SB 8160の開く築地塀SA 8170ができるのは天平年間であるのでC期に考えている。

SX 8941・8942はSF 8950の路面上で第2次朝堂院の方から西に流れ込む暗渠SX 8941と、南に折れる暗渠SX 8942である。瓦・礫が多量に詰っていた。

D期 第3次整地以後、第4次整地前の時期にあたる。

SD 8550は推定第1次朝堂院の東第2堂である。今回の調査で桁行8間分を検出したが、更に南に延び第102次調査分と合わせて梁間4間、桁行12間以上の規模となる事が明らかになった。SB 8550は東西幅28 m、残存高0.6 mの基壇の上に立つ礎石建ち東西両庇付南北棟である。今回の調査では第2堂の柱間、礎石据付法に関する良好な資料を得た。根固め石の配列から柱間を復原すれば、桁行14.5尺等間、梁間11.5尺である。礎石据付手順は、基壇築成がある程度まで進んだ段階で皿状に掘込み、川原石を詰める。その上に礎石を置き割石を周囲に詰め、版築を礎石の頂上近くまで積み上げる工法を取っている。

SB 8550の掘込地業には東西・南北の布掘りと柱2本分をカバーする坪掘りが見られる。南北方向の二本の布掘りの間に東西方向の布掘りが約2 m間隔に掘られている。坪掘りは東西方向の布掘りの間に配されている。二つの地業の前後関係は布掘りが先で、坪掘りが後という結果を得た。南北の布掘りは幅約1.0 m、深さ0.5 m、東西の布掘りは幅2.8 m、深さ0.4 mである。坪掘りの東西長さは確認しなかったが、南北幅は2～2.3 mである。坪掘地業の間隔は16尺であるが、基壇上の根固め石から復原される桁行（14.5尺）とは一致しない。そのため基壇が2時期に分かれる可能性もあるが、工事途中の計画変更と考えられる。両地業とも第3次整地を切って、粘土と砂質土で版築状につき固めている。

SB 8555はSB 8550の建設の際の足場である。柱の四隅と軒先、棟通りに径約

50 cm 程の穴を配している。軒先の足場には抜取穴が見られるが、基壇上の穴には抜取穴はない。棟通りの足場穴は発掘区の南半部のみに認められる。

SX 9003・9015 は SB 8550 の掘込地業の東・西肩の近辺に、南北方向に千鳥状に配された杭列で、西側 SX 9015 は残りはよいが、東側 SX 9003 は数ヶ所しか検出していない。基壇版築の樞板止めと考えられる。

SX 9016 は基壇の掘込地業の西肩から約 0.8 m 離れた位置にある南北方向の杭跡列である。8 尺間隔で配されている。やはり SB 8550 の建設に関係すると考えられるが、掘込地業の東肩には検出されなかった。

SX 9001・9002 は掘込地業の東肩に沿う南北方向の 2 本の溝状遺構で、地覆据付跡 SX 9001・同抜取跡 SX 9002 と考えられるが、西側では検出されなかった。

SD 9024・9025、SF 9026、SD 9024・9025 は第 2 堂の西側にある素掘りの東西溝で、SB 8550 の基壇の西 3 m の位置からはじまり、西に向って流れる。2 本の溝は柱筋に合っていて、両溝間は東第 2 堂への通路 SF 9026 と考えられる。両溝とも埋土に多量の瓦を含んでいた。

SA 5550 は B 期以降 2 回改修されている。A の柱を抜取り、ほぼ同位置に掘立柱塀 B が作られ、更に B を抜取り、築地 C を作る。B は一辺約 1 m、深さ約 0.6 m 程の掘形をもち、10 尺等間であるが、A より規模は小さい。

SB 8980 は推定第 1 次朝堂院の南北 2 等分線より、やや北に位置する間口 12 尺の門である。位置関係から SA 5550 - C に開く、くぐり門と考えられる。

SD 8392 は SA 5550 の西側雨落溝で、第 3 次整地面にあり、幅 0.5 m である。

SD 8552 は SD 8392 の西 3 m にある幅 0.5 m の南北溝で、残りが悪い。

SA 8985 は SD 8552 の西 2.4 m にある南北方向の掘立柱塀で 5 間分検出した。柱間寸法は不揃いである。第 102 次調査の SA 8553 と柱筋が通る。

SX 8970 は SD 3715 の西岸にある 4 個の掘立柱で、南西の掘形に柱根が残る。柱根は松材の角柱で東に傾いて立っていた。SD 3715 に架る橋とも考えられるが東岸に見合う柱穴はない。

SA 8962・8963 は SD 3715 の東岸にある掘立柱塀である。SA 8962 は柱間 6 尺

等間の南北塀で3間分検出した。SA8963はSA8962の東2mの位置からはじまる東西塀で、一間分(7尺)を検出した。

E期 第4整地以降廃絶までの時期である。

SB8960は桁行8間以上、梁行4間、10尺等間の二面庇付南北棟建物で、更に北に延びる。柱掘形は小さく、長方形のものと円形のものがある。径15cm程の広葉樹の黒木の柱根が5ヶ所に残っていた。

SA8967はSD3715とSB8960との間にある掘立柱塀で2間分検出した。柱間は7尺、10尺でSB8960と関係する遺構としてE期に入れた。

SX8954はSB8960の東6mにある凝灰岩片の堆積である。

SK8948は発掘区東北隅にある土壌でSF8950を切っていて、宮の廃絶に近い時期のものである。下層から平城宮V期の土器と木簡1点が出土した。

F期 朝堂院廃絶から第5次整地が行われるまでの時期にあたる。東第2堂とSA5550の空間地は鍛冶工房となり大小さまざまなピットが掘られる。

G期 鍛冶工房の廃絶後、SA5550と東第2堂間の窪みは大量の瓦を埋めて平坦に造成され、朝堂東側ではバラス混りの暗灰粘土で奈良時代の遺構を完全に埋めつくしてしまう。第5次整地は平安時代末に行われたものと考えられる。

遺物

木簡 総数24点出土した。SK8948から1点出土した他は、全てSD3715からの出土である。そのうち主要なものを次にあげる。

(表) □進上女瓦三百□ □丁冊五人

(裏) 神亀五年十月□ □秦小酒得麻呂

(表) 遠江国敷智郡□呼嶋

□□三百卅二大伴部山嶋九十

(裏) □□□六十□ 物部黒人七十 (表裏天地逆)

□□□六十□ 物部黒人七十

瓦埴類 今回出土の瓦埴類の内訳は、軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦、鬼瓦、熨斗瓦、面戸瓦、刻印瓦、埴である。軒瓦は総数1,048点(軒丸瓦411点・軒平瓦637点)、丸・平瓦はセメント袋にして500袋ほど出土した。

瓦埴類の大半はSA 5550 とSB 8550 の空間地を埋める瓦層から出土した。このうち大半を占める型式は軒丸瓦6313、軒平瓦6685である。次に瓦層出土軒瓦を時期別に見た場合、藤原宮式を含むⅠ期の軒瓦は20%、Ⅱ期の軒瓦は74%、Ⅲ期以降の軒瓦は6%となり、Ⅱ期の瓦が圧倒的多数を占める。SA 5550 Aの抜取穴から藤原宮式軒瓦が出土しており、SA 5550 に先立つ建物が無いので、SA 5550 Aには藤原宮式軒瓦が葺かれていたと考えられよう。

土器・土製品 土器の量は少ない。SA 5550 の西ではほとんど出土せず、土器の大半は朝堂院の東外郭部のSD 3715・8944・8945、SK 8948 から出土した。SD 3715 出土器は平城宮Ⅱ期から平安時代初期に編年される。またSD 3715 からは判読できないが墨書土器が数点出土した。瓦層には土器は少ないが、平城宮Ⅳ～Ⅴ期の土師器・瓦器が出土している。SB 8960 の柱抜取穴からは蹄脚礎の破片が出土した。土製品には土錘があり、SD 3715 から出土した。

木製品 木製品はSD 3715、SK 8948 から出土した。SD 3715 からは杓子1点、箸3点、加工竹材1点、加工木片400点程出土した。SK 8948 からは杭材1点が出土している。

金属製品は非常に少なく、銅鈴1点、銅釘1点、鉄釘1点、帯金具1点が出土したにすぎない。帯金具はSD 3715 から出土した。

その他の遺物 朝堂院廃絶後、SA 5550 の西側の一部が鍛冶工房となったが、それに関連する多数の鉄滓、ふいごの羽口が出土している。その他、出土層位は不明であるが、珊瑚玉1点がある。

まとめ

今回の調査の結査、東第2堂の規模は把握できなかったが、発掘区の中央の土壇はさらに南に延びており、第1次朝堂院の南北長が第2次朝堂院の大極殿前の回廊から十二堂院南門（平安宮の会昌門にあたる）までの距離と同じならば、第1次朝堂院の朝堂配置は、第2次のそれと異なり、東西に各2棟の南北棟が配置されている可能性が強くなったと言えよう。